The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	親密な対人関係に関する楽観性・効力感尺度の邦訳と信頼性・妥当性の検討
Author(s)	浅野, 良輔
Citation	対人社会心理学研究. 2009, 9, p. 121-130
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8087
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

親密な対人関係に関する楽観性・効力感尺度の邦訳と信頼性・妥当性の検討[1) 2)]

浅野良輔(大阪大学大学院人間科学研究科)

本研究では、Murray & Holmes(1997)によって作成された、親密な対人関係に関する楽観性尺度および効力感尺度を邦訳し(それぞれ、関係楽観性尺度、関係効力感尺度)、その因子構造を確認した上で、信頼性と妥当性の検証を行った。332 名の大学生を対象に(男性 167 名、女性 165 名)、質問紙調査を実施した。因子分析の結果、関係楽観性尺度は「結合予期」と「分離予期」の2因子から、関係楽観性尺度は「関係効力感」の単一因子からなることが示された。各因子について、Item-Total 相関分析や α 係数の算出を行ったところ、高い信頼性が示された。恋愛関係では、結合予期と関係効力感の得点が最も高く、分離予期の得点が最も低い傾向が認められた。さらに、これらの因子と、既存の尺度(e.g., GHQ12)との間には一定の関連性が示された。これらの結果は、邦訳した尺度の高い妥当性を示すものである。したがって、関係楽観性尺度と関係楽観性尺度は、本邦においても適用可能なものであることが示唆された。

キーワード: 親密な対人関係、関係楽観性、関係効力感、尺度作成、信頼性と妥当性

問題

本研究の目的は、Murray & Holmes(1997)によって作成された、親密な対人関係に関する楽観性と効力感を測定するための尺度を邦訳し、その因子構造の確認や、信頼性と妥当性の検証を行うことである。

対人関係において、自分とパートナーがどのように行動するかに関する期待や信念は、関係満足感や関係の安定性と関わる重要な要因となる。Rempel, Holmes, & Zanna(1985)は、親密なパートナーに対する信頼の最も重要な構成要素として、信念(faith)を挙げている。Downey & Feldman(1996)は、パートナーからの拒絶を期待してしまう拒否感受性の高い人が、恋愛パートナーの鈍感な行動から自らに対する拒絶を見出したり、パートナーのコミットメントの低さに対して過度にネガティブな解釈をしたりすることで、自分とパートナーの関係満足感を低下させるとの結果を報告している。

愛着スタイルは、対人関係に対する期待や信念と関わる個人特性として位置づけられており、パートナーとの関係における感情経験に影響を及ぼし、関係に対する評価や葛藤対処行動を規定するとの見解が示されている(Bartholomew & Horowitz, 1991; Hazan & Shaver, 1987; Shaver & Hazan, 1988)。例えば、回避型の愛着スタイルをもつ人は、恋愛に対して即時的なイメージをもつことで、パートナーに対する愛情や関係の評価を低める(金政・大坊, 2003)、葛藤時に別れ行動や無視行動といった関係破壊的な対処行動を行う、などの報告がある(金政, 2006)。同様に、個人特性としての楽観主義は、パートナーの知覚されたサポートの高さや積極的な問題解決行動を介して、良好な関係性を維持することが、縦断的なデザインによる研究から報告されている(Assad, Donnellan, & Conger, 2007; Srivastava, McGonigal, Richards, Butler, & Gross, 2006)。このように、対人関係における個人の期待や信念は、パートナーとの関係の質を規定する要因として考えられるのである(Miller, 1999 和田訳 2001)。

親密な対人関係に関する期待についての研究として、期待はずれに関する検討も行われている。期待はずれとは、パートナーに対する役割期待が、実際にパートナーから受けた役割行動と乖離することで、ネガティブな結果をもたらすという現象である。中村・浦(1999)は、友人関係におけるサポートの期待と受容量との期待はずれについて検討している。その結果、ストレス経験の頻度が高い場合には、サポートの受容が期待を下回ることで、自尊心や精神的健康が低下し、ストレス経験の頻度が低い場合には、サポートの受容が期待を上回ることで、自尊心や精神的健康が低下することを示している。こうしたサポートの受容に関する期待はずれは、サポート源に対する個別的信頼感を低下させることも報告されている(中村・浦, 2000)。また、恋愛関係における期待はずれは、関係内でのネガティブ感情を喚起し、精神的健康の悪化や、暴言や理不尽な批判といったパートナーへの間接的暴力を促進すると示唆されている(金政, 2008)。これらのことから、親密な対人関係における期待や信念は、良好な関係性のみならず、個人の well-being とも関連すると考えられる。

親密な対人関係に関する期待として、パートナーや関係全体に対するポジティブ・イリュージョンがある。元来、ポジティブ・イリュージョンとは、自己の評価やコントロール感、将来を過度に楽観視する傾向であり、精神的健康の高い人がもつ特徴として概念化されている(Taylor &

Brown, 1988)。Murray, Holmes, & Griffin(1996)は、このようなポジティブ・イリュージョンが、親密な対人関係という文脈においても生じ、関係満足感を予測することを明らかとしている。関係に対する個人のポジティブな期待がパートナーとの良好な関係性を促進するという現象は、親密な対人関係における予言の自己成就傾向を示すものと考えられる。本邦でも、こうした親密な対人関係におけるポジティブ・イリュージョン現象は、友人関係、恋愛関係、そして夫婦関係で認められており、良好な関係性や個人のwell-beingを予測することが報告されている(e.g., 遠藤, 1997; 小林, 2002; 外山, 2002)。

Murray & Holmes(1997)は、親密な対人関係におけるポジティブ・イリュージョンについて詳細に言及し、以下2つの側面に分類できるとの見解を述べている。すなわち、(1)関係の将来に対する楽観視、(2)関係に対する誇大した効力感ないしコントロール感、である(Murray & Holmes, 1997)。その上で、上記2つの親密な対人関係に関するポジティブ・イリュージョンを測定するため、親密な対人関係に関する楽観性尺度(measuring optimism in romantic relationships; 以下、関係楽観性尺度)、親密な対人関係に関する効力感尺度(measuring perceptions of efficacy or control in romantic relationships; 以下、関係効力感尺度)が作成されている(Murray & Holmes, 1997)。Murray & Holmes(1997)は、恋愛カップルと夫婦カップルを対象に調査を行い、関係楽観性尺度ならびに関係効力感尺度は、関係満足感を統制した後も、パートナーへの信頼感や愛情、葛藤の少なさ、12ヶ月後の関係持続を正に予測することが明らかとされている。また、関係楽観性尺度と関係効力感尺度の合成変数は、本人、ならびにパートナーの4ヶ月後と12ヶ月後の関係満足感を正に予測していた(Murray & Holmes, 1997)。なお、関係楽観性尺度と関係効力感尺度は、パートナー間で正に関連するとの報告がなされている(Murray & Holmes, 1997)。これらのことから、親密な対人関係に所属する二者は、関係についてのポジティブ・イリュージョンを相互に抱いており、それによって良好な関係性が構築されるものと考えられる。

以上から、本研究では、Murray & Holmes(1997)によって作成された関係楽観性尺度、ならびに関係効力感尺度を邦訳し、その信頼性と妥当性の確認を目的とする。なお、Murray & Holmes(1997)は、親密な他者との関係におけるポジティブ・イリュージョンを測定するために“典型的な(平均的な)関係”との比較を対象者に求めていた。しかし、邦訳版の作成にあたり、そのような比較を対象者に求めることはせず、単に現在の親密な対人関係についてポジティブな期待を抱いているかどうかを測定することとした。これは、対象者の思い浮かべる“典型的な(一般的な)関係”の範囲が特定できず、比較の対象が曖昧になるとの問題に依拠している。

方法

対象者

東北地方と関西圏の大学生387名(男性207名、女性175名、不明5名)を対象に、調査票を配布した。このうち、回答に不備のあった者や30歳以上の者を除き、332名を分析対象とした。男性167名(平均18.86歳, *SD* = 1.20)、女性165名(平均18.62歳, *SD* = 0.67)であった。

手続き

本調査に先立ち、2008年7月中旬に、邦訳した項目の日本語としての理解のしやすさを確認するため、大学生53名を対象とした簡単な予備調査を行った。この予備調査の結果を踏まえ、項目に若干の修正を加えた後、2008年9月下旬から10月中旬にかけて、集団形式にて本調査を実施した。調査票は回答終了後、直ちに回収した。回答に要した時間は、およそ20分であった。

質問紙の構成

最も親しい異性との関係 調査票への回答にあたり、対象者の想定する最も親しい異性との関係として、恋人、友達以上恋人未満、親友、友人、その他、から選択を求めた。さらに、その異性と知り合ってからの期間(恋人の場合は、交際期間)についても尋ねた。

相互作用 Bersheid, Snyder, & Omoto(1989)によって作成されたRelationship Closeness Inventory(RCI)を用いた。この尺度は、パートナーとの相互作用の頻度・多様性・強度を測定するものである。本研究では、久保(1993)によって検討された尺度に、一部修正を加えて使用した。対象者には、想定した最も親しい異性と1週間に会う回数、ならびに1回に会う時間(頻度)、最近1ヶ月にその異性と一緒に行った行動(全14項目の中から、該当するもの全てを選択; 多様性)、自分の生活、ならびに考え方に対してその異性が与える影響の強さ(強度)、それぞれに回答を求めた。なお、強度については、7件法(1～7)で評定を求めた。

関係楽観性尺度 Murray & Holmes(1997)が作成した尺度を、原著者(Dr. Sandra L. Murray)の許可を得て邦訳した。Murray & Holmes(1997)を元に、著者、社会心理学を研究している北米への留学経験をもつ大学院生1名、社会心理学を専門とする大学教員1名の計3名により邦訳された。邦訳の際には、日本語としての適切さと理解のしやすさに重点を置いた。原版は11項目からなり、評定は9件法(1～9)で行われていた。邦訳にあたり、回答者の負担を考慮して、評定は5件法(1. 全く思わない～5. 非常に思う)で求めることとした。得点が高

いほど、回答者の親密な異性との対人関係に関する楽観性が高いことを意味している。

関係効力感尺度 関係楽観性尺度と同様の手続きにて、邦訳を行った。原版は 10 項目からなり、9 件法(1～9)で評定されていた。邦訳にあたり、回答者の負担を考慮して 5 件法(1. 全く思わない～5. 非常に思う)を採用した。得点が高いほど、回答者の親密な異性との対人関係に関する効力感が高いことを意味している。

知覚されたサポート 最も親しい異性についての知覚されたサポートを測定するため、福岡・橋本(1997)が作成した尺度を用いた。この尺度は、情緒的サポートと道具的サポートに分類されている。本研究では、福岡・橋本(1997)から、それぞれ 3 項目ずつを抜粋した。5 件法(1～5; 以下同様)で測定し、得点の高いほど、情緒的ならびに道具的な知覚されたサポートが高いことを意味している。

親密性 最も親しい異性との親密さを測定するため、IOS 尺度(inclusion of other in the self scale, Aron, Aron, & Smollan, 1992)を測定した。IOS 尺度は、2 つの円の重なりの程度を 7 段階で設定し、対象者と想定するパートナーとの関係の親密さを最も適切に表現する図を選択するよう求める尺度である。IOS 尺度には、高い信頼性と妥当性が確認されている(Aron et al., 1992)。

個別的信頼感 最も親しい異性に対する個別的信頼感を測定するため、中村・浦(2000)によって作成された 1 項目からなる尺度を使用した。中村・浦(2000)では、この尺度が一定の再検査信頼性と予測的妥当性をもつことが示されている。本研究では、5 件法で評定を求め、得点が高いほど、個別的信頼感が高いことを表している。

特性的楽観主義 関係楽観性尺度と、個人の一般的特性としての楽観主義との関連を検討するため、吉村(1996)によって作成された 6 項目からなる尺度を用いた。尺度の信頼性と妥当性については、すでに確認されている(吉村, 1996)。本研究では、5 件法によって評定を求めた。得点が高いほど、特性的な楽観主義が高いことを意味している。

特性的自己効力感 関係効力感尺度と、個人の一般的特性としての自己効力感との関連を検討するため、特性的自己効力感尺度を測定した。この尺度は Sherer, Maddux, Mercandante, Prentice-Dunn, Jacobes, & Rogers(1982)が作成し、成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田(1995)によって邦訳されている。これは 23 項目から構成されており、邦訳版の信頼性と妥当性はすでに確認されている(成田ほか, 1995)。5 件法で評定を求めた。得点が高いほど、特性としての自己効力感が高いことを表している。

Table 1 関係楽観性尺度の因子分析結果

	F1	F2	h^2	*M*	*SD*
結合予期					
5) お互いの気持ち(友情あるいは愛情)はこれからも強くなっていくだろう	**.88**	.04	.75	3.09	1.18
3) 私たちとは関係の無い出来事や原因によって関係が脅かされたとしても、2人の関係はさらに親密になっていくだろう	**.84**	.04	.69	2.73	1.12
8) お互いの気持ち(友情あるいは愛情)は今と同じくらい強くあり続けるだろう	**.78**	-.10	.65	3.11	1.06
1) 今よりも、明るくてさらに満足のできる関係を築いていくだろう	**.78**	-.01	.61	3.14	1.15
10) 結婚することになるだろう	**.64**	.06	.39	2.04	1.28
6) 2人の関係がこの先ずっと続いたとしても、相手の存在にウンザリすることは絶対にないだろう	**.43**	-.28	.32	3.33	1.29
分離予期					
7) お互いの求めることに深刻なズレが生じてくるだろう	.10	**.77**	.56	2.43	1.07
11) 2人の関係の悪い部分が見えてくるようになり、私たちの間の溝はさらに深まっていくだろう	-.04	**.73**	.55	2.11	0.95
4) 相手の欠点が見えてくるようになり、2人の関係に疑問を感じるだろう	.01	**.69**	.48	2.27	1.15
9) 相手との関係の解消を考えてしまうような、魅力的な第三者が現れるだろう	-.23	**.43**	.28	2.75	1.27

因子間相関

F2 分離予期 -.23

註: 剰余項目 2) 今後6ヶ月以内に2人の関係は終わってしまうだろう

F1 = 第1因子への因子負荷量、F2 = 第2因子への因子負荷量、h^2 = 共通性、*M* = 平均値、*SD* = 標準偏差

主観的幸福感　伊藤・相良・池田・川浦(2003)が作成した、12 項目からなる主観的幸福感尺度を使用した。この尺度は、主観的幸福感の認知的側面と感情的側面を捉えることができ、その信頼性や妥当性、1 次元性が確認されている(伊藤ほか, 2003)。評定は 4 件法(1～4)で行い、得点が高いほど、主観的幸福感が高いことを意味している。

精神的健康　最近 2～3 週間の精神的健康を測定するため、Goldberg & Williams(1988)による General Health Questionnaire 12 項目版(GHQ12; 邦訳は中川・大坊, 1996)を使用した。回答は 4 件法で求め、得点は GHQ 得点法にしたがって算出した。得点が高いほど、精神的健康が低いことを表している。

結果

関係楽観性尺度・関係効力感尺度の因子構造

関係楽観性尺度の因子構造を確認するため、11 項目について因子分析(最尤法、共通性の初期推定値として SMC を用いた)を行った。分析の結果、固有値の減衰状況は、8.75、2.75、0.44、0.14 となったことから、3 因子目以降は剰余項目と考えられた。そのため、2 因子解を採用した。次に、2 因子解を仮定した上で、因子分析(最尤法、promax 回転、共通性の初期推定値として SMC を用いた)を実施した。いずれの因子にも.40 以上の負荷量を示さなかった 1 項目を除外した後に、残った 10 項目に対して再度因子分析を行ったところ、安定した 2 因子構造が得られた。

第 1 因子は、「お互いの気持ち(友情あるいは愛情)はこれからも強くなっていくだろう」、「私たちとは関係の無い出来事や原因によって関係が脅かされたとしても、2 人の関係はさらに親密になっていくだろう」など、6 項目の負荷量が高かったことから、「結合予期」と命名した。第 2 因子は、「お互いの求めることに深刻なズレが生じてくるだろう」、「2 人の関係の悪い部分が見えてくるようになり、私たちの間の溝はさらに深まっていくだろう」など、4 項目の負荷量が高かったことから、「分離予期」と命名した。これら 2 つの因子の間には、中程度の因子間相関が認められた(Table 1)。

なお、Murray & Holmes(1997)では、関係楽観性尺度は 1 因子構造として扱われていたことから、構造方程式モデリングによる確証的因子分析を行い、1 因子構造と 2 因子構造での適合度を比較した。分析の結果、1 因子モデルよりも(χ^2 = 381.16 (df = 35, p < .001), GFI = .77, $AGFI$ = .64, CFI = .74, $RMSEA$ = .18)、2 因子モデルのほうが(χ^2 = 122.80 (df = 34, p < .001), GFI = .93, $AGFI$ = .88, CFI = .93, $RMSEA$ = .09)、データに対するあてはまりが良いと判断された。この結果から、本邦における関係楽観性尺度は、10 項目 2 因子から構成されることが示された。

次に、関係効力感尺度の因子構造を確認するため、10 項目について因子分析(最尤法、共通性の初期推定値として SMC を用いた)を行った。分析の結果、固有値の減衰状況は、12.26、0.80、0.23、0.11 となったことから、2 因子目以降は剰余項目と考えられたので、1 因子解を採用した。次に、1 因子解を仮定し、因子分析(最尤法、共通性の初期推定値として SMC を用いた)を行った。因子負荷量の低かった(.40 未満)1 項目を除外した後に、9 項目に対して改めて因子分析を行ったところ、安定した

Table 2　関係効力感尺度の因子分析結果

	F1	h^2	M	SD
7) お互いに協力して、2人にとって望ましい理想の関係を築くことができる	**.84**	.70	3.20	1.10
4) 2人の求めることのズレをうまく解決できる	**.83**	.69	3.04	1.07
3) 2人の間で起きた問題について話し合うと、お互いが納得のいく結論にたどり着くことが常にできる	**.80**	.65	3.02	1.06
2) お互いに協力して、2人の間で起こる問題を解決できる	**.79**	.63	3.22	1.12
6) さまざまな困難に直面して動揺しても、お互いに相手の気分を和らげることが常にできる	**.78**	.60	3.16	1.10
1) 問題の解決に向けて、うまく物事が運ぶようにし合うことが常にできる	**.73**	.53	3.14	1.12
9) 2人の意見のズレをうまく解決するために必要な、コミュニケーション能力や問題解決スキルをお互いにもっている	**.70**	.49	3.02	1.07
8) 2人の間で起こる良いことも悪いことも思いどおりにできる	**.60**	.36	2.55	1.06
10) お互いに協力して、2人の間にやっかいな問題が起こらないようにできる	**.58**	.33	3.11	1.15

註: 剰余項目 5) 解決できない深刻な問題に直面すると、2人ともときどき無力感を感じる
F1 = 第1因子への因子負荷量、h^2 = 共通性、M = 平均値、SD = 標準偏差

因子構造が得られた。この結果から、関係効力感尺度は、“関係効力感”という単一の因子から構成されることが示された(Table 2)。

なお、関係楽観性尺度と関係効力感尺度との間で相関分析を行ったところ、関係効力感は、結合予期と有意な強い正の関連を($r = .75$, $p < .001$)、分離予期と有意な中程度の負の関連を示した($r = -.31$, $p < .001$)。

関係楽観性尺度・関係効力感尺度の信頼性

関係楽観性尺度と関係効力感尺度の信頼性を検討するため、これらの尺度について、Item-Total 相関分析を行った。その結果、関係楽観性尺度では、結合予期は 6 項目全てで尺度全体との間に 0.1%水準の有意な中程度の関連から強い関連がみられた($r = .45$～$.88$)。また、分離予期については、4 項目全てで尺度全体との間に 0.1%水準の有意な強い関連がみられた($r = .70$～$.79$)。同様に、関係効力感尺度では、9 項目全てで尺度全体との間に 0.1%水準の有意な中程度から強い関連が認められた($r = .67$～$.85$)。また、同じく信頼性の検討のため、Cronbach の α 係数の算出についても行った。その結果、結合予期は $\alpha = .87$、関係効力感は $\alpha = .91$ という高い値が示された。ただし、分離予期については $\alpha = .74$ となり、尺度としての使用には十分に耐えうるものの、若干低い値となった。以上の結果から、邦訳した尺度は高い信頼性を備えていることが示された。

関係楽観性尺度・関係効力感尺度と性別ならびに異性関係との関連

関係楽観性尺度、および関係効力感尺度の得点について検討するため、性別と最も親しい異性との関係性を独立変数とした 2 要因分散分析を行った(最も親しい異性との関係を“その他”と回答した 11 名は除外した)。分析の結果、結合予期、分離予期、関係効力感の全てにおいて、関係性の主効果がみられた($F(4, 304) = 51.30$, $p < .001$; $F(4, 305) = 3.13$, $p < .05$; $F(4, 297) = 19.20$, $p < .001$)。なお、性の主効果、ならびに性と関係性の交互作用については認められなかった。関係性の主効果について、多重比較(Ryan 法)を行った結果を、Table 3 に示す。結合予期と関係効力感については、「恋人」の得点が最も高く、「友人」の得点が最も低かった。一方、分離予期については、「友達以上恋人未満」の得点が最も高く、「恋人」の得点が最も低かった。

関係楽観性尺度・関係効力感尺度と異性関係の質との関連

関係楽観性尺度、および関係効力感尺度と、最も親しい異性との関係の質との関連を検証するため、関係継続期間、RCI の各指標、知覚されたサポート、IOS、個別的信頼感との間で相関分析を行った。相関分析の結果を、Table 4 に示す。なお、これら異性関係の質についての尺度の基準統計量についても、Table 4 に記す。分析の結果、結合予期と関係効力感は、RCI の各指標、知覚されたサポート、IOS、個別的信頼感のいずれとも有意な弱い正の関連から中程度の正の関連を示していた。しかし、結合予期と関係効力感は、関係継続期間との間に有意な関連を示さなかった。一方、分離予期は、関係継続期間、会う時間、情緒的サポート、IOS、個別的信頼感との間に、有意な弱い負の関連から中程度の負の関連を示していた。

関係楽観性尺度・関係効力感尺度と特性としての楽観主義・自己効力感との関連

関係楽観性尺度、ならびに関係効力感尺度と、個人特性としての楽観主義と自己効力感との関連を検討するため、相関分析を行った(Table 4)。また、特性的楽観主義と特性的自己効力感の記述統計量についても Table 4 に示す。分析の結果、結合予期と関係効力感は、特性的自己効力感と有意な中程度の正の相関関係を示していた。一方、分離予期は、特性的自己効力感と有意な弱い負の関連を示していた。なお、いずれの因子についても、特性的楽観主義とは有意な関連が認められなかった。

Table 3 性別および関係性別の関係楽観性尺度・関係効力感尺度の平均値(標準偏差)

	男性	女性	恋人	友達以上恋人未満	片思い	親友	友人
結合予期	2.88 (0.92)	2.80 (0.99)	3.80 (0.88) a	2.82 (0.60) b	2.66 (0.71) bc	3.04 (0.65) b	2.32 (0.71) c
分離予期	2.46 (0.83)	2.31 (0.80)	2.24 (0.94) a	2.74 (0.58) b	2.60 (0.85) ab	2.19 (0.82) ab	2.38 (0.75) ab
関係効力感	3.08 (0.78)	3.08 (0.86)	3.57 (0.81) a	3.23 (0.59) ab	3.05 (0.74) bc	3.41 (0.63) ab	2.71 (0.74) c

註: 男性 n = 161～163、女性 n = 146～151、恋人 n = 79～81、友達以上恋人未満 n = 35～36、片思い n = 29～30、親友 n = 24～25、友人 n = 138～145、各行において異なるアルファベットの間に $p < .05$の有意差あり

Table 4 関係楽観性尺度・関係効力感尺度と既存の尺度との関連、ならびに既存の尺度の平均値、標準偏差、α係数

	関係楽観性		関係効力感	*M*	*SD*	α 係数
	結合予期	分離予期				
異性関係の質						
関係継続期間(ヶ月)	-.12	-.16 **	-.03	28.94	41.24	—
会う回数(回／週)	.47 ***	.01	.26 ***	1.07	1.73	—
会う時間(分／回)	.36 ***	-.16 **	.29 ***	180.21	448.47	—
行動の多様性	.59 ***	-.11	.42 ***	2.33	2.22	—
生活に与える影響	.65 ***	.00	.45 ***	3.94	2.05	—
考え方に与える影響	.59 ***	-.08	.45 ***	3.78	1.93	—
道具的サポート	.52 ***	-.03	.38 ***	2.74	1.06	.74
情緒的サポート	.54 ***	-.23 ***	.60 ***	3.58	1.03	.80
IOS	.67 ***	-.12 *	.52 ***	3.36	1.84	—
個別的信頼感	.56 ***	-.34 ***	.53 ***	3.91	0.96	—
個人特性						
特性的楽観主義	.11	-.05	.11	2.93	0.54	.68
特性的自己効力感	.32 ***	-.18 **	.32 ***	2.83	0.68	.84
well-being						
主観的幸福感	.28 ***	-.17 **	.29 ***	2.98	0.41	.81
GHQ12	-.14 **	.20 ***	-.19 ***	4.56	3.17	.81

註: N = 244～334、*p < .05、**p < .01、***p < .001

関係楽観性尺度・関係効力感尺度と well-being との関連

関係楽観性尺度、および関係効力感尺度と、個人の well-being との関連を検討するため、主観的幸福感ならびにGHQ12との間で相関分析を行った(Table 4)。主観的幸福感と GHQ12 の記述統計量についても、Table 4 に記す。分析の結果、結合予期、分離予期、そして関係効力感と、主観的幸福感および GHQ12 との間に、有意な弱い関連から中程度の関連が認められた。これらの結果は、結合予期と関係効力感が高く、分離予期が低いほど、主観的幸福感ならびに精神的健康が高いことを示すものである。

考察

本研究の目的は、Murray & Holmes(1997)が作成した親密な対人関係に関する楽観性尺度(関係楽観性尺度)、ならびに効力感尺度(関係効力感尺度)を邦訳し、その因子構造や、信頼性と妥当性について検討することであった。質問紙調査の結果、関係楽観性尺度は“結合予期”と“分離予期”から構成され、関係効力感尺度は“関係効力感”という単一因子からなることが示された。これらの尺度について、各項目と尺度全体との関連や α係数を検討した結果、いずれも十分な値が示された。また、各因子の得点に性差はみられないものの、最も親しい異性との関係性によって得点に差のあることが示された。さらに、最も親しい異性との関係の質、個人特性、well-being についての既存の尺度との間で、一定の関連性が認められた。以上の結果から、本研究で邦訳した 2 つの尺度は、高い信頼性と妥当性を備えており、本邦でも適用可能なものであることが示唆された。

因子構造

関係楽観性尺度の因子構造は、Murray & Holmes(1997)とは異なり、結合予期と分離予期という 2 つの因子から構成されることが、探索的因子分析および確証的因子分析の結果から示された。このことは、親密な異性関係に関する楽観性が、「自分たちの関係は、今後さらにポジティブなものとなっていくだろう」という期待と、「自分たちの関係にとって、今後ネガティブな出来事が起こるだろう」という期待、これら 2 つの要因から構成されることを示唆している。Murray & Holmes(1997)は、関係楽観性尺度の使用に際して因子構造の検討を行っておらず、この知見は本研究において初めて実証されたものである。一方、関係効力感尺度については、先行研究と一致する結果がみられ(Murray & Holmes, 1997)、「関係効力感」という単一の因子から構成されることが示された。

信頼性

関係楽観性尺度、および関係効力感尺度の信頼性を検討したところ、いずれの因子にも高い信頼性が確認された。すなわち、3 つの因子に共通して、全ての項目が該当する因子と中程度から強い関連性を示していた。また、 α係数についても、結合予期と関係効力感は高い

値が示された。ただし、分離予期の α係数は比較的低いものとなった。このことは、分離予期に含まれる項目数が 4 つと、若干少ないことに起因する可能性が考えられる。

性別・異性関係との関連

関係楽観性尺度、および関係効力感尺度について、いずれの因子においても、得点の性差は認められなかった。この結果は、Murray & Holmes(1997)によって報告されたものと一致するものである。以上のことから、関係楽観性尺度と関係効力感尺度は、性別の影響を受けないことが示唆された。

一方、関係楽観性尺度と関係効力感尺度は、最も親しい異性との関係性によって得点が異なることが示された。すなわち、結合予期と関係効力感については、「恋人」で最も得点が高くなり、「友人」で最も得点が低いという結果となった。このことは、結合予期と関係効力感が、友人関係から恋愛関係という関係の段階が進展するに伴い(松井, 1993)、上昇することを示唆している。分離予期については、「恋人」の得点が最も低く、「友達以上恋人未満」の得点が最も高かった。恋愛関係は、排他性や相互依存性の高さゆえに(e.g., Martz, Verette, Arriaga, Slovik, Cox, & Rusbult, 1998; 相馬・浦, 2007; 山下・坂田, 2008)、二者だけの世界に没入する傾向にあり、多角的な情報収集がなされにくく、自分たちの関係にネガティブな事態が生じることを予期できないと推察される。また、こうした結果は、良好な恋愛関係を維持するには、関係性の認知に「鈍感」であることも必要であるとの見解とも一致するであろう(大坊, 2004)。一方、友達以上恋人未満という、非常に曖昧模糊な関係性では、日常のコミュニケーションにおいて不一致が生じやすく(多川・吉田, 2006)、ネガティブな出来事が生じることを予期しやすいものと考えられよう。

異性関係の質との関連

関係楽観性尺度、ならびに関係効力感尺度と、最も親しい異性との関係の質の間の関連について検討を行った。その結果、結合予期と関係効力感は、関係継続期間とは関連しておらず、会う回数や時間、相互作用の多様性といった行動的な指標、影響強度、知覚されたサポート、IOS、個別的信頼感との関連が認められた。特に、結合予期と関係効力感が、相互作用の頻度ならびに多様性と正の関連を示したことは、これらの要因が実際の相互作用の機会を反映して上昇することを示唆するものであろう。加えて、関係効力感は、知覚されたサポートのうち、道具的サポートよりも情緒的サポートと強く関連する傾向がみられた。関係効力感の高い人ほど、親密な他者から情緒的サポートを特に享受していると考えられる(橋本, 2005)。また、情緒的サポートのほうが、道具的サポートよりも得点の高いことを加味するならば、高い関係効力感をもつには、より高い水準の情緒的な知覚されたサポートが必要であるとの推察が可能である。

一方、分離予期については、関係継続期間、会う時間、情緒的サポート、IOS、そして個別的信頼感と有意に関連していた。特に、分離予期は、結合予期と関係効力感とは異なり、関係継続期間との間に有意な負の関連を示していた。この結果は、「自分たちの関係にとって、今後ネガティブな出来事が起こるだろう」という期待が、当該の親密な他者との関係が長く継続するほど、減少していくことを示唆するものである。関係継続期間が長くなることで、自己開示の内容もより進展し、互いの理解度が増すと考えられる(Altman & Taylor, 1973)。そのために、二者のダイナミクスが円滑に進展するような役割行動を行うことができ、関係の維持ならびに発展にとってネガティブな影響を及ぼす出来事の発生を予期しなくなると考えられる(下斗米, 2000)。

個人特性との関連

関係楽観性尺度、および関係効力感尺度と、個人特性としての楽観主義と自己効力感との関連を検討した。その結果、結合予期、分離予期、そして関係効力感の全てが、特性的自己効力感と有意に関連していた。すなわち、個人の特性的自己効力感が高いほど、関係楽観性や関係効力感が高くなると解釈できる。その一方で、いずれの因子も、特性的楽観主義との間には有意な関連を示さなかった。この結果については、関係特性としての関係楽観性が、個人特性としての楽観主義に依存しない概念であることを示すものと推察できる。また、特性的楽観主義尺度の α係数が若干低かったために、変数間の相関係数が希薄化したという、方法論的な問題も考えられるであろう。

well-being との関連

関係楽観性尺度、および関係効力感尺度と、主観的幸福感、ならびに GHQ12 との関連を検討した。その結果、全ての変数の間に一定の関連性が認められた。すなわち、結合予期や関係効力感の得点が高い人ほど、主観的幸福感や精神的健康が高く、一方で分離予期の得点が高い人ほど、これらの well-being に関する指標は低いことが示唆された。

まとめと今後の展望

本研究では、Murray & Holmes(1997)の作成した、関係楽観性尺度と関係効力感尺度を邦訳し、その因子構造や、信頼性と妥当性の検討を行った。その結果、これらの尺度は、高い信頼性と妥当性を有しており、本邦においても適用可能であることが示された。

ただし、本研究では、邦訳した尺度の再検査信頼性や予測的妥当性については検討していない。今後、縦断

的なデザインを用いて、関係楽観性尺度と関係効力感尺度の時系列的な安定性や、一定期間後の関係継続に及ぼす影響などを確認することが必要であろう。

さらに、Murray & Holmes(1997)で報告されているように、本研究で邦訳した尺度が親密なパートナーとの間で互いに関連し合うのかについても検討することが必要であろう。パートナー間で関係楽観性や関係効力感に関連性がみられるということは、親密な二者がこれらの期待を共有していることを示すものである。そのため、これらの尺度を親密な対人関係にあるペアに適用することで、そのペアに共有されたプロセスを捉えることが可能と考えられる。

引用文献

Altman, I., & Taylor, D. A. (1973). *Social penetration: The development of interpersonal relationships.* New York: Holt, Rinehart & Winston.

Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D. (1992). Inclusion of other in the self scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63, 596-612.

Assad, K. K., Donnellan, M. B., & Conger, R. D. (2007). Optimism: An enduring resource for romantic relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 93, 285-297.

Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.

Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. M. (1989). The relationship closeness inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 792-807.

大坊郁夫 (2004). 親密な関係を映す対人コミュニケーション 対人社会心理学研究, 4, 1-10.

Downey, G., & Feldman, S. I. (1996). Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1327-1343.

遠藤由美 (1997). 親密な関係性における高揚と相対的自己卑下 心理学研究, 68, 387-395.

福岡欣治・橋本 宰 (1997). 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, 68, 403-409.

Goldberg, D., & Williams, P. (1988). *A User's Guide to The General Health Questionnaire.* Windsor, England: NFER-NELSON.

橋本 剛 (2005). ストレスと対人関係 ナカニシヤ出版

Hazan, C., & Shaver, P. R. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 511-524.

伊藤裕子・相良順子・池田政子・川浦康至 (2003). 主観的幸福感尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 74, 276-281.

金政祐司 (2006). 恋愛関係の排他性に及ぼす青年期の愛着スタイルの影響について 社会心理学研究, 22, 139-154.

金政祐司 (2008). 期待はずれがうみ落とせしもの ―青年期の恋愛関係における期待はずれが関係内の感情経験と適応性に及ぼす影響― 日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集 112-113.

金政祐司・大坊郁夫 (2003). 青年期の愛着スタイルが親密な異性関係に及ぼす影響 社会心理学研究, 19, 59-76.

久保真人 (1993). 行動特性からみた関係の親密さ ―RCI の妥当性と限界― 実験社会心理学研究, 33, 1-10.

小林知博 (2002). 自己・他者評価におけるポジティブ・ネガティブ視と社会的適応 対人社会心理学研究, 2, 35-43.

Martz, J. M., Verette, J., Arriaga, X. B., Slovik, L. F., Cox, C. L., & Rusbult, C. E. (1998). Positive illusion in close relationships. *Personal Relationships*, 5, 159-181.

松井 豊 (1993). 恋ごころの科学 サイエンス社

Miller, R. S. (1999). Dysfunctional Relationships. In R. M. Kowalski & M. R. Leary (Eds.), *The social psychology of emotion and behavioral problems: Interfaces of social and clinical psychology.* Washington, D. C.: American Psychological Association. pp. 311-338. (和田 実 (訳) (2001). うまく機能していない関係 安藤清志・丹野義彦 (監訳) 臨床社会心理学の進歩 ―実りあるインターフェイスをめざして― 北大路書房 pp. 361-396.)

Murray, S. L., & Holmes, J. G. (1997). A leap of faith? Positive illusions in romantic relationships. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 586-604.

Murray, S. L., Holmes, J. G., & Griffin, D. W. (1996). The benefits of positive illusions: Idealization and the construction of satisfaction in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 79-98.

中川秦彬・大坊郁夫 (1996). 日本版GHQ 精神健康調査票手引き 日本語GHQの短縮版: 解説 日本文化科学社 pp.117-147.

中村佳子・浦 光博 (1999). 適応および自尊心に及ぼすサポートの期待と受容の交互作用効果 実験社会心理学研究, 39, 121-134.

中村佳子・浦 光博 (2000). ソーシャル・サポートと信頼との相互関連について ―対人関係の継続性の視点から― 社会心理学研究, 15, 151-163.

成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 (1995). 特性的自己効力感尺度の検討 ―生涯発達的利用の可能性を探る― 教育心理学研究, 43, 306-314.

Rempel, J. K., Holmes, J. G., & Zanna, M. P. (1985). Trust in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 95-112.

Shaver, P. R., & Hazan, C. (1988). A biased overview of the study of love. *Journal of Social and Personal Relationships*, 5, 473-501.

Sherer, M., Maddux, J. E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobes, B., & Rogers, R. W. (1982). The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports*, 51, 663-671.

下斗米 淳 (2000). 友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究 ―役割期待と遂行のズレからの検討― 実験社会心理学研究, 40, 1-15.

Srivastava, S., McGonigal, K. M., Richards, J. M., Butler, E. A., & Gross, J. J. (2006). Optimism in

close relationships: How seeing things in a positive light makes them so. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 143-153.
相馬敏彦・浦　光博 (2007). 恋愛関係は関係外部からのソーシャル・サポート取得を抑制するか ―サポート取得の排他性に及ぼす関係性の違いと一般的信頼の影響― 実験社会心理学研究, 46, 13-25.
多川則子・吉田俊和 (2006). 日常的コミュニケーションが恋愛関係に及ぼす影響 社会心理学研究, 22, 126-138.
Taylor, S. E., & Brown, J. D. (1988). Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, 103, 193-210.
外山美樹 (2002). 大学生の親密な関係性におけるポジティブ・イリュージョン 社会心理学研究, 18, 51-60.
山下倫実・坂田桐子 (2008). 大学生におけるソーシャル・サポートと恋愛関係崩壊からの立ち直りとの関連 教育心理学研究, 56, 57-71.
吉村典子 (1996). 日本語版楽観主義尺度の検討 日本心理学会第 60 回大会発表論文集, 31.

註

1) 本論文は、2008 年度大阪大学大学院人間科学研究科に提出した修士論文の一部に、加筆・修正を行ったものである。ご指導いただきました大坊郁夫先生(大阪大学大学院人間科学研究科)に、深く御礼を申し上げます。

2) 原著者の Sandra L. Murray 教授(University at Buffalo)には、本研究の実施にあたり、尺度邦訳の許可をいただきました。記して感謝いたします。調査の実施に際しましては、荒木剛先生(東北大学大学院文学研究科)、後藤学先生(原子力安全システム研究所)のご協力を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。また、尺度の邦訳にあたりましては、菊池文音さん(大阪大学大学院人間科学研究科)に多大なご協力をいただきました。ありがとうございました。

Development of a Japanese version of the relational optimism scale and the relational efficacy scale, and examination of its reliability and validity

Ryosuke ASANO (*Graduate School of Human Sciences, Osaka University*)

In this study, we developed Japanese versions of the measuring optimism in romantic relationships and the measuring perceptions of efficacy or control in romantic relationships (the relational optimism scale, the relational efficacy scale, respectively; Murray & Holmes, 1997). Also, we confirmed their factor structures, and further examined their reliabilities and validities. Participants were 332 undergraduates (167 males, 165 females). The results of factor analysis showed that the relational optimism scale was composed of 2 factors; "union expectancy" and "separation expectancy" and that the relational efficacy scale was a one-factor structure; "relational efficacy". We found high Item-Total correlation coefficients and internal consistency of each factor. The results revealed that the scores on union expectancy and relational efficacy were the highest and the score on separation expectancy was the lowest in romantic relationships. In addition, the scores of each factor were correlated with other measures (e.g., GHQ12). These findings indicated that the translated scales were highly valid. Therefore, this study suggests that the relational optimism scale and the relational efficacy scale are applicable to Japanese samples.

Keywords: close relationships, relational optimism, relational efficacy, development of the scale, reliability and validity.